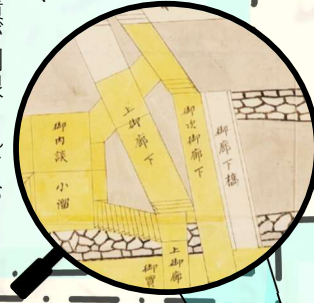


今も多く残る盛岡城の平面図には、それぞれに多種多様な部屋や施設が描かれています。

今回は、もりおか歴史文化館で所蔵している「盛岡城明細図」をもとに特徴的な部屋などについて細解いてみましょう！

廊下橋

現在の渡雲橋の場所に架かっていた二ノ丸と本丸を結ぶ橋。盛岡城は、地形的に本丸の面積が制限されており二ノ丸に設けられた大書院と本丸御殿をこの廊下橋で繋ぎ、本丸の多様な機能を二つの地区に分散することで、その狭さを補完していました。



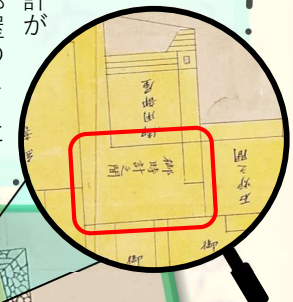
橋は「上御廊下」「御次御廊下」「御廊下橋」の3本があり、身分等により通る橋が決められていたとされます。築城当時、橋に屋根はありませんでしたが、寛文8（一六六八）年に、火災で焼失した本丸御殿が再建された際、屋根がかかる橋となりました。

御時計之間

複数の平面図に描かれている部屋です。

名前から、時計が置かれていた部屋のように思われますが、今のところそれを示す記録はなく、老中の執務室の一つであったと考えられています。

盛岡藩には「御時計師」という職人がおり、各種史資料によると、時計の献上や修繕、細工などを行うほか釘隠しの修繕なども行っていたようです。



御舞台・御数寄屋

能舞台は、神社のお祭りなどでも行われ、身分を問わず楽しまれました。ほかに、相撲や神楽、湯治など、物資の交流の活発化とともに、様々な文化や遊びが上方や江戸から伝えられ、城下町盛岡でも育まれていきました。

能興行は、神社のお祭りなどでも行われ、身分を問わず楽しまれました。ほかに、相撲や神楽、湯治など、物資の交流の活発化とともに、様々な文化や遊びが上方や江戸から伝えられ、城下町盛岡でも育まれていきました。

楽しみが嗜みでもあるように、文化とは城下町や藩の発展を支えるものであり、また、繰り返す日常に刺激や潤いを与え、人々の心を豊かにするものでした。ここに掲載した盛岡藩御抱絵師の家系に

残る史資料には、往時の人々が、数々の楽しみに興じる姿が描かれます。

そこには、今も変わることのない、たくさんの笑顔あふれる瞬間が切り取られています。

御居間

一般的な部屋ですが、藩主のプライベートな居室です。隣には「御十五畳」という藩主の寝室がありました。内装について記された史資料によると天井は「浅キニムラサキカスリ」、襖は紺青地の桐青海波の文様という造りになっていました。



青海波の文様

「盛岡城襖図譜」桐の文様の一例
：もりおか歴史文化館収蔵

盛岡城小噺

#嗜みと楽しみ

本丸御殿にも能舞台や茶室が整えられていたように、能楽や茶の湯、和歌などは、藩主が楽しむ娯楽であるとともに、幕府や他藩との交流を深めるための藩主の嗜みでもありました。

特に能楽については、熱心な藩主も多く、江戸城において将軍の前で能を披露したという藩主の記録も残されています。宝暦3（1753）年には、藩で

所蔵する能面の数が、343個にも及び、能楽を学ばせるために家臣を江戸に送るなど、藩としての能楽者の育成も行っていたようです。

能興行は、神社のお祭りなどでも行われ、身分を問わず楽しまれました。ほかに、相撲や神楽、湯治など、物資の交流の活発化とともに、様々な文化や遊びが上方や江戸から伝えられ、城下町盛岡でも育まれていきました。

楽しみが嗜みでもあるように、文化とは城下町や藩の発展を支えるものであり、また、繰り返す日常に刺激や潤いを与え、人々の心を豊かにするものでした。ここに掲載した盛岡藩御抱絵師の家系に

残る史資料には、往時の人々が、数々の楽しみに興じる姿が描かれます。

そこには、今も変わることのない、たくさんの笑顔あふれる瞬間が切り取られています。

盛岡城復元調査推進室の取組の詳細は、市ホームページに掲載しています。
盛岡城に由来があると伝わる資料や建物等に関する情報などありましたら、盛岡城復元調査推進室（019-613-7956）まで、情報提供をお願いします。

